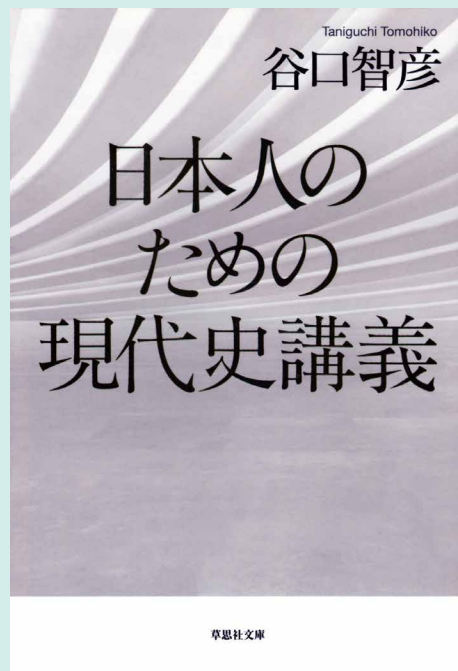


『日本人のための現代史講義』

◆著者——谷口智彦

◆発行所——草思社

◆定価——九〇〇円(税別)



ISBN : 978-4-7942-2416-3

保守主義には「自国の文化・伝統を愛し守る」、「全体主義から自由を守る」という2つの要素があると思う。前者が内面で後者が外面、あるいは前者が原因で後者が結果といってもいいかもしれない。必然的に保守は「国家」という枠組みを重視し、リベラルはこれに無関心ないし嫌悪する。学校で教える現代史が退屈で不毛なのは国家観が決定的に欠落しているからだと思うが、本書はまさに国益の観点から第2次大戦後の世界を解き明かす。国籍のない学者が研究対象とする歴史ではなく、今日を生きる我々日本人が明日を切り拓く道標としてのそれである。

本書の内容を評者(満岡)なりにざっくりまとめると以下のようになる。「戦後米国がどのようにして英国から覇権を奪い、新たな世界システムを作ったのか」、「そのシステムの中で我が国がどうして成長できたのか」、「挑戦者として現れた中国とはどのような国なのか」「我が国の歩む道はどのようなべきか」。

それぞれのテーマで目を引いた点を挙げてみよう。○米国は既に戦時中にブレトン・ウッズ体制を考案して英国に対して優位に立ち、スエズ動乱(1956年)で英国を打ちのめしてその覇権を奪い取った。○ニクソンがド

ルと金の交換を停止した(ドル・ショック)1971年が戦後史の分水嶺であり、これによって米国の覇権は完成した。しかし、その陰には西側世界のリーダーとして冷戦に臨んだ米国の苦悩と責任意識があった。○金の蓄えなしに通貨を発行できるそのシステムは、米国にとって都合の良いルール変更であったと同時に自由主義社会全体を潤した。○このシステムがあったからこそ、西側社会は共産主義に勝利することができた。○その恩恵にもっとも浴したのは日本だった。○太平洋戦争で日本を叩き潰した米国は、朝鮮戦争で境に、必死になって日本を支え、育て、守った。○日本が、全体主義・中国、専制主義・ロシア、あの朝鮮半島に隣接している限り、同盟する相手は(好きでも嫌いでも)米国しかない。○米国とともに日本が組むべきパートナーとして、中国と対立するインドの重要性。

評者は、スターリンに担がれたルーズベルトやトルーマンが、残虐非道な原爆投下や東京空襲によって日本を廃墟にした挙句、今度は一転して(逆コース)日本を庇護した点については、「ふざけるな」という思いもあったが、しかし本書を読んで多少考えを改めた。敗戦直後、確かに日本は共産化の危機に瀕していたし、それを措いても、例えば第一次大戦後に英仏がドイツにしたような仕打ちを米国が日本にしていたらどうなっていたことか。

そして中国である。筆者は人類史に

残るおぞましい汚点として、毛沢東が「大躍進」政策(1958年)において4000万人もの中国人を餓死あるいは拷問死させたことを紹介する。通常の飢饉や内戦による犠牲者とは桁違いのこうした大殺戮は、全体主義体制以外では起こり得ない。全体主義の最悪形態が共産主義であると評者は以前述べたが、筆者は次のように指摘する。「共産党という組織だけが史上初めて、大義や思想、高邁な目的のもと、殺人を制度化し、かつ長続きさせることに成功した」、「このような支配の構造を醜悪なまでに達成した初期の例がソ連であって、最も長寿の例が中国である」。今彼らが新疆・ウイグルで何をやっているのか、いざれ歴史が暴くだろう。こんな国を長く支援した事実を我々は猛省せねばならないし、二度と共産主義の本質を見誤ってはならない。

筆者は本書を書き終えた後、内閣官房参与として安倍前首相の外遊演説のスピーチライターを務めることになる。筆者が参加した安倍内閣は、「自由で開かれたインド太平洋」構想とその中核となる「クアッド(日米豪印戦略対話)」という輝かしいレガシーを残した。本書は評者がこの2年間に読んだ中で最も有益な1冊だったが、同じ筆者による「安倍晋三の真実」もまた実に面白かった。安倍政権の功績を正當に評価しないメディアの論調に辟易している方にお勧めしたい。

(広報部部員 満岡 渉)